

・ 視点アジア

分かち合う世界へ 44、変異株 刻々と脅威増す

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2021/07/04 16:51

タイでは感染力の強いインド由来のデルタ株が急速にまん延している。6月28日には全国の一日のコロナウイルスの新規感染者が5397人、そのうちバンコクだけで1678人と記録を更新した。以前から続いている飲食店内での飲酒の厳禁に加え、同日から1カ月間、店内での食事も禁止になった。日本とは違い、政府からの休業補償も公約だけで実際に行われず、規則を破ると 심각한刑罰が科せられるタイでは、気の毒に思えるほど、おとなしくみんなが政府の命令に従っている。

政策的な遅れが当初から問題視されていたが、タイではこの6月初旬から日本と同じようなタイミングでワクチンの接種が加速化されてきている。中国製のシノバック・バイオテック製とタイ国内で生産が可能になったアストラゼネカ製の2種類が大半である。シノバック・バイオテック製は人気が高く、できればアストラゼネカ製にしたいとタイ人の大半が思っているようだが、アストラゼネカ製は供給不足で接種予約日が突然延期になったり、2回目の接種が3カ月後になったりというような不都合が生じている。シノバック・バイオテック製は効果が懸念されており、3、4回ぐらい接種しないと十分な抗体ができないのではないか、といううわさをよく耳にする。

タイ政府は、われわれ長期滞在する外国人にもタイ国民と同様に無料のワクチン接種の機会を与えてくれている。私も恩恵にあずかり、第1回目のワクチン接種(シノバック・バイオテック製と指定されたが)を28日に済ませた。

最近のニュースによるとデルタ株はイギリスのようなワクチン接種先進国でも猛威を振るい、新型の変異株に対する既存ワクチンの有効性が大きく懸念されている。それに加え、ペルーでは「C37 ラムダ株」という新たな変異株が発生し、新規感染の80%以上が既にこのラムダ株に置き換わり、南米を中心に29か国で急速な感染の拡大が確認されているという。世界保健機関(WHO)によるとこのラムダ株は感染力

がさらに強く、中和抗体に対する耐性を持つ(要するにワクチンが効きにくい)可能性があるという。一説ではワクチンの効果が3分の1や5分の1に減少する恐れがあるという。

絶対安心安全というブラジル政府のお墨付きの下で無観客で最近始まったサッカーの南米選手権では、CNNの報道によると6月22日の時点で、42人の登録選手を含めて約140人の大会関係者が新型コロナウイルスに感染したという。WHOはアフリカ地域で6月最後の一週間にその前の週に比べて新規感染者が34%、死者が42%急増したと発表した。今までなりを潜めていたアフリカについに火がついた、と思うと寒気がする。

オリンピックを契機に南米やアフリカからも多くの選手や関係者が日本にやってくる。だが、本当に大丈夫なのか。毎日のように変化する新型コロナウイルスをめぐる状況に流動的に対処する政策の柔軟性が今、最も強く求められている。そして、アフリカや他の地域からも耐性のある強力な変異株が新たに発生する危険性をわれわれは常に念頭に置くべきだろう。ワクチンが開発され、一時は収束の方向に向かっていると思われた新型コロナウイルス禍だが、まだ先は長いようだ。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。